

追悼・小林静枝

セーラー服の思い出

青木智代

五月十六日午後五時すぎ、姪の小林幾代さんより「母」が倒れ救急車で須坂病院へ……との電話がありました。取り急ぎ病院へ急ぎました。夕方のラッシュ時でもあり、気持ちばかり焦りました。病院の夜間入口より入り案内されて顔を見た時、静枝姉さんは何も無かったかのように穏やかに眠っており、もう帰らぬ人となっておりました。あまりにも突然の事で唯、茫然とし、悲しいのに涙も出ませんでした。

お姉さんは寺に帰り懇ろにお経を上げていただき、今まで出会った大勢の方々との別れの時が静かに流れて行きました。

お葬式が済み、お庫裡の広間の床の間で阿弥陀様の胸に懐かれた遺骨と、にこやかに笑った写真の前に座り手を合わせると、色々と子供の頃のことを走馬燈のように思い出されます。

私が小学校入学（昭和十八年）の時にセーラー服に白線二本を入れ、シンガーマシんで縫ってもらったこと。セーラー服の布地は母親が機織

してくれた絹地であったこと。又赤色とグレーのセーターを編んでもらったことなど、今でもはつきり思い出されます。

お姉さんが浄運寺へ嫁ぎ姪の幾代さんが生まれてから、お子守をしたくてお寺に行くのがとても楽しみな子供時代でした。

又私の子供達もお祭りや夏休みに毎年のように浄運寺へ行つては、お姉さんからお小遣いをもらって夜店へ行ったり、広いお寺で遊んだりして楽しませてもらい、大変お世話になり感謝でいっぱいでした。私も最近まで畑仕事を少し手伝いに行ったり、野沢菜漬を一緒にしたり、梅漬や色々の漬物を教わったり、思い出は尽きません。静枝姉さんとは十三歳の年の差があり、母親のように思っていたのかもしれない。

お姉さんの人生の終焉は、美しく咲いた残花が静かに散り行くように、静かに美しく、お姉さん長い間本当にありがとうございました。

縁あって寺に嫁ぎ六十有余年、浄運寺の歴史の中のひとときを支えることができた姉を誇りに思う愚妹でもあります。

本堂の工事も進み、浄運寺様の益々のご隆盛を心よりお祈り申し上げます。

合掌

（妹、長野市田町）

自慢の母

小林幾代

小学校の授業参観日、私は何度も後ろを振り返っては母を捜していました。お母さんは若くてきれいな――それが私の自慢だったのです。

母は手先が器用で仕事も速く、特に編み物は得意でした。子供の頃母が編んでくれた白と黄色の縞のコートに思いを馳せると、当時の様々な淡い記憶と相俟って、懐かしさが込み上げてきます。編み物の事は母も晩年良口口にしていましたし、作品を見せてくれましたから、自分でも満足していたのだと思います。

妹や私が家族で遊びに来ていて帰る日、母は私達に色々持たせてくれました。決して不自由はさせまいとの気遣いからです。最後の最後までそうでした。又、長い間民生委員等の社会福祉活動も積極的に行っていました。二十枚近くもの感謝状・表彰状が出て来たのには驚きです。

母は内にも外にも人に尽くした人だと思います。今はただただ感謝です。「お母さんありがとう。私はお母さんの娘で幸せでした」。母は私に

とって誇りであり、自慢です。

（長女、練馬区桜台）

お母さんは太陽

清水君子

いつも笑顔でいるのが当たり前だった母。世話好きで、大らかで明るくて太っ腹、賑やかなのが大好きで子供たちが騒いでも元気がいいって叱られたことがありませんでした。今行っている本堂屋根替え工事もトンカントンカンが聞こえてくると、ニコニコして庭に出て眺め、最後は必ず業者さんの車の数を数え「今日は何台来ている」と楽しそうでした。手先が器用だったので、セーター、帽子など編んでくれました。料理も得意で煮物など色々してくれました。本当に感謝です。母の部屋を少し片付けたらセンスの良い帽子やバックがあり、お洒落していたみたいで嬉しくなりました。長年民生委員等を務め、厚生大臣からも感謝状を頂いておりました。

母はここ数年「子供たちに面倒見てもらえて私は幸せ」が口癖でした。日が過ぎるごとに、苦勞はしたけれど幸せな人生を送ったと、大往生だつたと改めて感じております。

お母さんありがとう。優しく強い母で、私にとって太陽でした。

（二女、大磯町）